

## 中国の中東原油依存の方向性（要旨）

福山大学 島 敏夫

### はじめに：

19993年から石油純輸入国、1990年代中ごろからは原油の純輸入国となった中国にとって、拡大し続ける石油需要に対応することは大きな課題である。豊富な石炭および石油資源により国内のエネルギー需要を自給してきた中国にとって、石油の安定確保は新しい問題である。生産拡大、海外石油資源開発の権益確保、多様な地域からの輸入ルートの確立等々を積極的に試みる中国の戦略は国際石油市場に影響を与えるものもある。本論は中国の今後の原油確保がどのように展開していくかを見定めようとするものである。

### 1. 一次エネルギー消費の現状と将来展望

12億以上の人口を抱える中国は1990年代の急速な経済成長とともにエネルギー需要を急増させてきた。2000年における中国の一次エネルギー消費量はアメリカに次いで世界第二位である。この一次エネルギーを構成するのは石炭、石油、天然ガス、水力電気、原子力であり、表1は1991年から2002年の間のエネルギー源別の消費実績である。中国のエネルギーの中心は石炭で、圧倒的に石炭の比率が高く、90年代初めには80%近い比率を占めていた。しかし、1996年をピークに石炭の消費量が年々減少し、2000年には全体の63.8%にまで減少している。石炭消費量の減少がエネルギー全体の消費量を押し下げているが、他のエネルギーの消費は増加している。特に石油の消費量は1991年の117.9百万トンから2000年には226.9百万トンに増えしており、全体に占める比率は17.4%から30.1%と急激な増加をみている。表1では1996年頃をピークに総エネルギー量の消費が緩やかに減少傾向を示しているが、2001年には833.6百万トン、さらに2002年には997.8百万トンと最高値を記録し、石油消費量も245.7百万トンと最高値を記録している。この消費量をカバーするために、これまで減少し続けていた石炭の消費量比率が再び上昇している。このことは、石油が石炭に取って代わりつつあるというものの、石油の確保が追いついていないことを示している。

表1. 1次エネルギーの消費実績

単位：石油換算百万トン

	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2002年	%
石炭	534.9	549.5	570.3	606.4	635.7	676.9	649.3	614.0	511.0	480.1	663.4	66.5%
%	79%	78%	77%	77%	76%	76%	74%	73%	68%	64%	66%	
石油	117.9	129.0	140.5	149.5	160.7	174.4	185.6	190.3	200.0	226.9	245.7	24.6%
%	17%	18%	19%	19%	19%	20%	21%	23%	27%	30%	25%	
天然ガス	13.4	13.6	14.6	14.9	15.9	15.9	17.4	17.4	19.3	22.3	27.0	2.7%
原子力	0.1	0.4	3.6	3.3	3.7	3.7	3.9	4.1	4.3	5.9	0.6%	
水力	10.8	11.4	12.4	14.3	16.0	16.1	16.1	17.1	18.2	19.0	55.8	5.6%
計	677.0	703.6	738.2	788.7	831.6	887.0	872.1	842.7	752.6	752.6	997.8	100.0%

(出所)BP Amoco Statistical Review of World Energy 2000年～2003年版より作成

### 2. 中国の原油輸入の現状と中東依存への方向

中国の国別原油輸入の推移をみると、1995年の最大の輸入相手国はインドネシアであり約530万トン、率にして約30%であった。次いでオマーンから約370万トン・21%、イエメンから約250万トン・約15%を輸入していた。しかし、インドネシアからの輸入は1997年にピークを記録した後減少しており、2000年の比率は6.5%しか占めていない。一方、オマーンからの輸入は約3倍に増えているが中国の輸入量の増加率と同程度に増えているので、シェアは22.3%と横ばいに推移している。イエメンからの輸入は360万トンに増えているが、全体のシェアは5.1%に減少している。これに対して、中東のイランは1995年には5.5%のシェアでしかなかったが、2000年には700万トン・10%のシェアに拡大した。と同時に、その他中東からの輸入も増えているが、これにはサウジアラビアが含まれる。

中国の原油輸入を地域別にみると、1992年には約60%をアジア地域から輸入していたものが1999年にはわずか19%にまで減少した。これはアジアの中でもインドネシアからの輸入量が激減したことによる。2002年末におけるインドネシアの確認埋蔵量は50億バレルで可採年数は11.1年である。既存油田は成熟期に入っており、しかも多孔性であるという複雑な地質学的特徴を抱えていることから、急速に枯渇に向かっている。インドネシアの2002年の原油生産量は約128万B/Dであり、開発余力はそれほど多くないとみられている。石油需要は年々増加しており輸出余力がなくなりつつある。

これに対して、アフリカ地域からの輸入が1992年の4%から1999年には18%とアジア地域とほぼ同量を輸入するまでに拡大している。アフリカ地域、特に西アフリカにおける石油開発が近年進展していることからその成果が中国の輸入実績に現れている。アフリカ地域からの輸入実績を見ると2000年の輸入実績は1999年の2倍以上に急増している。2001年の実績は2000年を下回っているものの1999年に比べると2倍近い値である。なかでも、アンゴラとスーザンからの輸入増が著しい。しかしながら、輸入全体に占める比率は1999年19.8%、2000年24.1%、2001年22.5%であり、中東地域の46.2%、53.6%、56.2%と比較すると、1/2以下にしかすぎない。しかも、中東原油の占有率は依然として拡大傾向を辿っている。つまり、アフリカ原油の輸入は拡大しているものの、依然として中東原油を主要輸入原油と捉えていることが読み取れるのである。

開発参加を積極的に行っているカスピ海周辺からの原油調達の実績については現状では輸送問題が解決していないので輸入実績としてはカザフスタンから1999年491千トン、2000年724千トン、2001年650千トンにしかすぎない。しかしながら、長期的な観点から中国はカザフスタンからの原油輸入を重要視しており、2003年6月には両国間でカザフスタン西部から中国までのパイプライン建設に関する契約が調印された。中国にとって中央アジア地域の石油資源は中東に取って代わるだけの可能性を有しているのだろうか。

中国はアメリカに次いで第二の石油消費国になろうとしている。巨大石油消費者同士の競争という点で米中は2大ライバルである。石油を争奪しあうことになる。米国は今日イラクに強大な影響力を持ち、パレスチナ和平を推進し、米国流のやり方で中東地域を安定させようと試みている。中国の中東依存は米国の中東政策の展開により翻弄されるリスクを持っている。米国はサウジアラビアのアルカイダなどのテロリ

ストグループに対する対応が手ぬるいとサウジアラビアに対する非難を強めている。またイランにとっても核兵器開発疑惑をつきつけて対峙しようとしている。中国は米国に対抗するような形で、これら 2 国に積極的に近づいていこうとしている。2000 年 6 月にイランのハタミ大統領が中国を訪問し、その際にテヘラン市の地下鉄建設に対して中国が一億ドルを投資すると決定した。2000 年 12 月には中国企業が進めてい るイランのアゼルバイジャン州の発電所建設に中国輸出銀行が 11 億元の融資を決定した。2001 年 12 月にはケルマン市のコークスおよびタルのプラント建設設計画の契約を調印した。2003 年 7 月現在日本が進めているイラン最大のアーザデガン油田開発が米国の圧力で頓挫しかけているが、この油田開発に対して中国がアプローチを始めている。イランからの原油輸入の代償に経済開発プロジェクトを推進していく戦略である。同様に 1999 年 11 月に当時の江沢民主主席がサウジアラビアを訪問して以来、経済協力関係が推進されつつある。今後、中国の原油確保は中東産油国からの輸入に依存する度合が高いが、その中でも特にイランとサウジアラビア両国からの輸入が中心になるであろう。

### 3 . おわりに

筆者は、今後中国はイラン、サウジアラビア両国と関係を強化して中東原油の輸入を主要な原油供給源としていくであろうと予測した。しかしながら、米国と両国の関係悪化の懸念もある状況で、中東依存の度合が高まる事は決して良い事ではない。

中国はアフリカからの原油輸入確保も拡大させることを継続しなければならない。アンゴラ、ナイジェリア、スーダン等々の国々である。ここでもこれらの国々の対米関係を考慮するとスーダンが主要な相手となるであろう。

中央アジアは中国にとって隣国である。特にカザフスタンの豊富な資源には魅力があり中国西部の国境へのパイプラインはカザフスタンの生産規模の拡大と高石油価格が保たれれば有効なプロジェクトである。しかしながら、これらの国々は既に米英西側勢力の強い影響下にあり、この地域への中国の参入は歓迎されていない。例えば、中国はカザフスタンのカシュガンのガス鉱区の権益をブリティッシュ・ガス社から買い取ろうとしていたが、ロイヤル・ダッチ・シェル社とエクソン・モービル社に阻まれた。また、カザフスタンがイランにスワップ輸出する原油の精製施設建設に中国が支援していることに対しても米国は不快の意を示している。この地域からの原油確保も多分に米国の思惑に左右されるリスクが伴う。

やはり最後は、中国の石油政策はロシア原油の安定供給を確保することになるだろう。ここ 2 年ほどロシアは米国とエネルギー面でも急接近してきた。赤い石油が米国に輸出されることがおきている。しかしながら、ロシアがバランスを失ってまで米国に接近することはない。中国との関係は、中国がロシアに対する思惑同様に重要である。中国はシベリア原油をロシアから輸入することになる。東シベリアからの石油パイプラインは日本向けのナホトカ・ルートも絡んでいるが、中国ルートは大慶へつながるパイplineである。シベリアという内陸部の原油は市場から遠いということで市場性が低く開発が遅れたが、中国という市場への販路が確立すればロシア・中国双方にとって効用は大きい。

中国の原油確保の問題は経済性のみならず、政治的な判断を巻き込んだ大きな国際問題である。